

第 86 回 歴史リレー講座「聖徳太子と片岡山飢人の伝承世界」 阿部 泰郎氏 (R3.11.21)

聖人同士の奇蹟的な出逢いと別れを描いた片岡山飢人伝説は古来さまざまな書物が取り上げていますが、初めて登場したのは『日本書紀』(推古紀二十一年条)です。片岡山を視察中の聖徳太子は死に瀕した飢人を憐れみ、衣を脱ぎ与えて歌(しなてる片岡山に飯に飢て臥せるその旅人あはれ…)を贈ります。太子が作らせた墓を使者が後日訪れると棺の亡骸は消え、衣だけが残されていました。飢人が実は聖人だと気付いた太子はその衣を平然と身にまとった(聖は聖を知る)という内容です。

『上宮廢戸豊聡耳皇太子伝』には、『日本書紀』をほぼ元にした「片岡山伝説」が見えます。ここでは飢人がその場で歌(鶺鴒の富の小川の絶えばこそわが大君の御名忘れめ)を返しており、歌問答の形に変化しています。注目すべきは、注釈「かのうえびとは けだしこれだるまか彼飢人者、盖是達摩歟」で飢人の正体が初めて暗示されることです。これが太子と達磨大師との邂逅伝承を決定づけました。その背後には、太子が中国の慧思えし禅師の7代目の生まれ変わりだという伝承があります。平安時代に天台宗を開いた最澄も、飢人の実体はかつて中国で慧思と契りを交わした達磨であり、ともに日本に生まれ変わって再会を果たしたと確信しています。

また、『上宮聖徳太子伝補闕記』に見える同伝説は、太子の妻や従者も登場する本格的な物語です。磯長にある自らの墓を訪れた帰り道、太子を乗せた黒駒が片岡山のとある家の前で動かなくなり、見ると飢人が道に倒れています。太子が衣を与えて歌をやり取りしたのち、飢人はその場で息を引き取ります。後日、太子が臣下を飢人の墓に遣わすと、衣は残されていたが紫の衣(法衣を暗示)だけが無かったという今までにない脚色が見られます。飢人が聖人であったことが全面に押し出されており、飢人の死後も太子は歌を贈っていることから、全体が歌物語として成立していることも大きな特徴です。

古代の太子伝集大成である『聖徳太子伝暦』は、のちの太子伝研究の典拠となる重要な史料です。『日本書紀』を元にしながらも、整然とした形に作り直されています。飢人伝説が確立した10世紀末は仏教説話や和歌などが大いに発展すると同時に、古今和歌集を始めとした勅撰集や『竹取物語』や『うつほ物語』などが生まれました。

勅撰集『拾遺和歌集』の片岡山伝説における両者の歌は和歌の形に変化しています。また、『喜撰式』で飢人が文殊に置き換わっているのは、紛れもなく文殊信仰の表れでしょう。一方、和歌の歴史書ともいえる『古来風躰抄』(鎌倉時代)も同伝説を取り上げています。これまでに紹介した史料は互いに影響を受け合って語り続けられてきたため、全体的に見渡すと飢人伝承の意味がおのずと見えてきます。これらの伝承を中世に繋ぎ渡した鎌倉初期の『建久御巡礼記』(のちの『南都巡礼記』)には、ある信仰深い女院が南都の諸大寺を訪れた様子が綴られています。女院は法隆寺に詣でたあと、中将姫曼荼羅を納める當麻寺へ向かう途中の片岡山中で飢人の墓を訪れます。

ところが、法隆寺の太子障子絵伝には不思議なことに片岡山伝説が描かれていません。中世にはさまざまな学僧が『聖徳太子伝暦』を拠りどころに研究を行いました。これらの学問や秘伝を納めたものが太子の生涯を表した物語『正法輪蔵』です。また、『沙石集』という仏法説話集には片岡山の達磨廟の初期の姿が見えます。このように、禅が日本仏教界の中心という流れが興りますが、天台宗からは飢人伝説を読み替えることで禅を亡国の教えとして批判する声が上がります。これに対して禅宗は飢人伝説こそが禅の縁起だと主張。鎌倉末期にかけては飢人伝説が発するメッセージをどう解釈するかで、両者の熾烈なせめぎあいまで発展しました。興福寺(法相宗)の末寺という法隆寺の立場も障子絵伝に微妙な影響を与えたのかもしれませんが。「達磨寺中興記」によると、鎌倉時代後期に興福寺によって焼き払われたものの南北朝時代には復興を遂げ、室町時代には足利義満も達磨寺を参詣しています。その後も片岡山飢人伝承が寺院の宗教的なよりどころであり続けたことが太子信仰の大きな原動力になっていったのだと思います。